

氏名（本籍）	KOCYIGIT Zuhal				
学位の種類	博士（国際日本研究）				
学位記番号	博 甲 第 9750 号				
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日				
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当				
審査研究科	人文社会科学研究科				
学位論文題目	周縁化された女性たちの表象 －19世紀後半から20世紀初頭における日本とトルコの自然主義文学 作品をめぐって－				
主査	筑波大学	准教授	博士（学術）	平石	典子
副査	筑波大学	教授	博士（宗教学）	津城	寛文
副査	筑波大学	教授	博士（学術）	加藤	百合

論 文 の 要 旨

本論文は、近代化の過程で西欧の自然主義文学に影響を受けた日本とトルコの文学が試みた新しい女性表象に着目し、その意味や意義を追求したものである。女性の社会的位置の変貌が顕著だった19世紀に西欧で発展した自然主義文学は、作品に多く中・下級階層の女性を登場させた点でも特徴的であったが、本論文は比較文学研究の手法を用いて日本とトルコの文学作品にあらわれた「周縁化された女性像」を分析・考察することによって、19世紀後半から20世紀初頭の日本とトルコの自然主義文学の特徴を再考することを目的としている。

論文の構成は以下の通りである。

序 章

第1章 トルコ文学における自然主義と女性描写

第2章 狂気と女性

第3章 妾から愛人へ

第4章 *Mürebbiye* と『地獄の花』における女性家庭教師の表象

終 章

序章で研究目的と研究背景、先行研究と本論文の位置付けについて述べられた後、第1章ではまず19世紀までのトルコ文学とその後の自然主義文学の移入について概観され、アラブ文学とペルシア文学を中心としたトルコ文学の特徴が示されるとともに、19世紀後半のフランス自然主義文学のトルコ文学への影響についてまとめられている。続いて日本の前期自然主義文学とリアリズムについても述べられ、トルコと日本のフランス自然主義文学受容の様相が比較的観点から考察されている。第2章以降、周縁化された女性像が論じられていくが、第2章で取り上げられるのは狂気に陥った女性像である。19世紀に精神病として科学的に分類され、自然主義文学作品の中では遺伝と環境の言説の範囲内で取り扱われた狂気が、この時期に西欧の文学に触れたトルコと日本の作家たちに新しい視点から描かれた作品をもたらしたことを明らかにする本章では、Halid

Ziya Usakligil (1866 - 1945) の *Sefile* 『墮ちた女』(1886 - 1887 年)、 Ahmet Midhat (1844 - 1912) の *Hayal ve Hakikat* (筆者訳『夢と現実』、1892 年)、 渡辺霞亭 (1864-1926) の「狂女」(1896 年) と島崎藤村 (1872-1943) の「老嬢」(1903 年) が取り上げられている。近代化の過程にあったオスマントルコと日本の社会において、新しい思想は、当時の新しい教育を受けた上層階級の女子たちに強い影響を与えたが、文学作品においては同時代の社会の価値観を変える恐れのあるこうした女性たちが狂気によって周縁化されていることが指摘され、日本とトルコのこうした女性の狂気の描き方が、各国の文化的文脈に基づく狂気の分類とその「再」発見とも関連していることが明らかにされている。第 3 章で論じられるのは、「妾」の表象である。トルコ文学では、19 世紀後半にフランス語由来の *metres* が登場し、トルコ社会でそれまで使われていた *kuma* (本妻以外の妻) の代わりに文学作品に姿を見せるようになったが、本論文は、当時の辞書や翻訳を用いてその意味を明確にし、明治時代における妾の意味についても考察した後、Hüseyin Rahmi Gürpınar (1864-1944) の *Metres* (メトレス、1900 年) と永井荷風 (1879-1959) の『夢の女』(1903 年)、小杉天外の (1865-1952) 『はやり唄』(1902 年) の分析・考察を通して、ギュルプナルが新しい「愛」の概念と「身体的関係」を批判的に取り扱っていること、小杉天外が『はやり唄』で適用した自然主義文学の「遺伝」という構造の特殊性、荷風が『夢の女』において、日本社会における女性の直面した困難や精神的な混乱を客観的に分析していることを明らかにしている。また、ギュルナブルと天外の作品において、メトレス/妾が妻の自己意識を引き起こす存在となっている点にゾラの顕著な影響があり、ゾラの『制作』(1886 年) の直接的影響が、夫の油絵をメトレス/妾を描いたものと直感した妻が憎悪を向ける、という両作品の酷似した場面に見られることを指摘している。第 4 章では永井荷風の『地獄の花』(1902 年) とギュルプナルの *Mürebbiye* (女性家庭教師、1899 年) における女性家庭教師の表象が論じられる。いずれの作品もゾラの自然主義文学の影響で書かれた作品であるが、主人公が女性家庭教師であるという共通点の重要性が指摘され、ゾラが『ナナ』の中で使用した *institutrice* という単語が、当時のフランスでは女性教師を意味するために使われていたが、トルコにおいてはフランス人女性家庭教師を指しており、日本においても翻訳の過程でやはり家庭教師とされたことが明らかにされている。また、両者とも、「環境」や「運命」といったものが人生を左右する、という点をゾラから受容し、その立場と「住み込み」という環境によって自分や雇用主の「運命」が変わる家庭教師を主人公に設定した一方で、それぞれの作家が家庭教師を描く目的は異なっていたことについても述べられている。

以上の考察から、終章では本研究の成果をまとめるとともに、今後の課題について述べられる。同時代に近代化を経験したトルコと日本の近代文学においては、周縁化された女性たちの表象が新しい思想を受け入れるための手段であったこと、こうした女性たちは、近代化がもたらした、当時の社会が簡単に「容認できない」概念や行為を表していること、こうした表象によって、男性作家たちがこの女性たちを「話されない主題」を描きうる者として取り上げていたことなどを明らかにすることで、本論文が両国の自然主義文学受容研究や近代文学研究に寄与するものであるとしている。

審 査 の 要 旨

1 批評

本論文は、日本とトルコの自然主義文学の比較研究を、両者に共通する「周縁化された女性表象」という観点から試みた、大変意欲的な研究である。フランスや日本、トルコの自然主義文学をめぐる先行研究においても、「周縁化された女性」の表象についてはまだ十分な研究がなされていない状況であり、日本とトルコの文学の比較研究というものもまだほとんど存在していない。本論文は、対比研究の立場からの比較研究によって、このような状況に風穴を開け、トルコ文学と日本文学の比較研究の端緒を開こうとするものであ

る。

筆者はトルコ語、日本語、英語、フランス語で書かれた作品や資料を読み解き、同時期にフランスの自然主義文学から影響を受けた日本とトルコの近代文学が、中・下層階級の「周縁化された女性」の描写を通して何を描きだそうとしていたかに迫っている。狂気に陥る女性の描写が、伝統的な「狂女」と近代科学の言説における「ヒステリー」の間でそれぞれの文化を背景に新しい形で定着していったことを明らかにし、「妾」や「女性家庭教師」の表象については、当時の辞書やこれらの語が使用されたフランス自然主義文学の翻訳の状況を調査することから始めて、ゾラやモーパッサンの作品の受容が、トルコと日本においてどのような形で作品化されているのかを詳らかにしている。筆者の地道な資料の渉猟と、フランスの自然主義文学作品とウシャックギル、ミドハト、ギュルプナル、渡辺霞亭、島崎藤村、小杉天外、永井荷風らの著作を照らし合わせた分析・考察は、取り上げたトルコ文学と日本文学作品の新しい読みの可能性をも示しており、それぞれの国の自然主義文学研究や、近代化と文学の関連をめぐる議論に新たな知見を与えるものである。また、「周縁化された女性」の表象をテーマとして取り上げた本論文は、ジェンダーやセクシュアリティの観点からも、関連する研究分野の進展に寄与するものであるといえる。

一方で、個々の作品の比較については説得力のある議論が展開されているものの、文学思潮や文学理論についての理論的考察や、第1章で論じられている伝統文学と、自然主義の影響を受けた作品との関係についての論述が足りないことなど、まだ不十分な点があるのも確かである。また、「中・下層階級の女性」が文学作品において描かれる際には、「読者」の問題についての考察も必要なのではないかという疑問もないわけではない。とはいえ、これらの問題点については、今後、筆者が研究を深化させる中でやがて解消に向かうことは十分に期待できる。

以上のように、本論文には改善されるべき課題もあるものの、その中で導き出された種々の新知見は、学界に対する大きな貢献であり、本研究の成果は、優れたものであると評価できる。

2 最終試験

令和3年1月18日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（国際日本研究）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。